Hello, Fukuoka.
Hello, Good Quality of Life

心地いいまち、選ばれるまち

私たちの福岡

今、福岡で暮らしたい人が、増えている

Name	須賀 大介さん
Age	[illegible]
Occupation	プロデューサー
From	[illegible]

「福岡移住計画」代表の須賀大介さんに聞こう

3月、東京で「ぼくらの移住計画2014 in TOKYO」が開催された。参加者募集の段階から、福岡でも東京でもちょっとしたウワサになっており、定員160席はわずか5日間で完売。その後追加された70席も合わせて、満員御礼となったという。

これをプロデュースした「福岡移住計画」代表の須賀さんも、福岡移住者だ。震災を経験し、「もっと本質的な生き方をしたい」と2012年に家族で福岡にやってきた。

現在、暮らしているのは、福岡市西区のはじっこで、家の目の前は美しい海。「東京なら、3〜4時間移動しないと見られないですよ」という景色を日々満喫している。

移住後、須賀さんのライフスタイルは、ガラリと変わった。東京では会社に泊まり込みで働く日々。それが今は近所に焼きたてパンを買いに行き、海を見ながら家族で朝ごはんを食べる時間もある。また「福岡の人々は、子どもへのまなざしが温かい」と須賀さんは言う。以前は虫が苦手だった長男は、外に飛び出し元気に遊ぶ、人なつっこい子に育っている。

仕事のやり方も随分と変化した。東京時代は、効率が最優先で直線的な行動をとるしかなかった。でも、福岡では、人とつながり、地域を愛し、一緒に楽しんで働き、地域で生きる感覚を確認できている。

福岡移住のきっかけにもなった糸島との縁を大切にしていて、現在、糸島のポータルサイトを制作中だ。6月には糸島、芥屋でゲストハウスとカフェをはじめる。今後は、福岡の人々と共に、福岡の素晴らしさを日本へ海外へ発信していきたいそうだ。須賀さんから時たまこぼれるナチュラルな博多弁。福岡へ張られた根っこは、ゆっくりと、でも着実に、力強く伸びていく。

福岡のクオリティ・オブ・ライフはかなりの高水準

その実力をデータで見てみよう！

数々のランキングで、「住みたいまち」として注目されている福岡市。今、日本国内だけでなく、世界で輝くまちとして成長を続けている。選ばれる理由には、住環境・働き方・交通・食、そして人々の雰囲気など、さまざまな側面がある。しかもそれは、イメージの世界だけでなく、数々のデータにより立証された事実なのだ。新生活がはじまる4月。あなたが住む福岡のまちが、こんなにも心地いいというシアワセ。世界に誇れるクオリティ・オブ・ライフ（QOL）について考え、さらにまちを知り、楽しもう！

世界に認められた心地いいまち福岡

英誌「モノクル」の特集「世界で最も住みやすい25の都市ランキング」（2012年版）

世界12位

森記念財団「世界の都市総合力ランキング」

通勤・通学の利便性1位、食事の魅力5位ほか

1 福岡市民はとにかく福岡が大好き！

- ●福岡市が「好き」と答えた福岡市民 → 96.4%
- ●福岡市は「住みやすい」と答えた福岡市民 → 95.3%

2 「女の子がカワイイ」には理由があった！

- ●エステサロンの数 → 政令市1位
- ●婦人服店の数 → 政令市1位
- ●ヨガ教室の数 → 政令市1位

3 多彩な飲食店の数などが日本でイチバンの食都！

- ●定食屋、活き魚料理店、洋風居酒屋の数 → 全国1位
- ●そば・うどん店、持ち帰り飲食サービス業の従業者数 全国1位

4 プライベートを楽しみすぎる！

- ●就業時間の短さ 全国1位
- ●3次活動時間の長さ 全国2位

5 おいしいだけじゃない、安い！のもうれしい

- ●食料の消費者物価地域差指数（食料の安さ）
全国20大都市中1位

6 人口増加比率1.06%で、福岡市は人口が増えている

人口増加比率全国1位
2013年に150万人を突破！

LOVE FM「TRANSIT RADIO」毎週月曜20:00〜21:30 OA

福岡に移住したら、そこが地元になった

常盤 響さん

人同士がいつの間にかつながる感覚が残るまち

就職後、東京の高い家賃と該子算出する仕事の容量がアンバランスに思えてきた頃、移住熱が頭をもたげる。「東京育ちだし、このままだと地方から一歩も出ていない人と一緒だとも思って（笑）」

それから下見として札幌と沖縄のDJツアーを敢行し、移住先を福岡に決定。月に1週間は東京に行くので、飛行機や新幹線の足まわりの良さ、生活コストを考えたら、必然的な選択だったという。実は、福岡に友達も知り合いもなくて、それも上京したての大学生のような気分に入っていた。

福岡に住んで、そろそろ3年。今、おもしろいのは「地元感」だ。東京での活動拠点は、若い頃からずっと渋谷周辺。しかし、何分前からそこを「地元」として感じられなくなっていた。「街は昔と同じなのにね。渋谷はもともとそこにいる人のまちじゃなく、渋谷に来た人と一緒にテンションを高めている人のまちに変わったんです。僕にはそれが窮屈に感じはじめて」。

福岡はレコード屋やバーでの顔見知りが友達に発展し、そこからまた友達を紹介され、関係が広がっていくまち。学生時代、仲間とつるんでいた時のような感覚に近いと常盤さんは言う。大名で飲んでいると、今、長浜にいるんだけどと連絡が入り、じゃあ合流しようかと話が進む。大御所Rアが推薦、というフットワークの軽さも気に入っている。

この春からはLOVE FMのプログラムも担当する常盤さん。福岡が加速度的に、もっと地元になっていく。

常盤さんのFUKUOKA MEMO

FRUCTUS フラクタス

食べものも、気持ちも、もっと自然派へ

成田 愛子さん、才毅くん

肩のチカラが抜けたゆとりのある人とまち

東京で、愛子さんが夫と営んでいた店「フラクタス」。国立競技場や新宿御苑の近くで自然派フルーツジュースや自家製グラノーラを提供していた。息子の才毅くんが愛子さんのおなかに宿り、充実した日々。しかし、2011年3月、東日本大震災が起こる。

とにかく西へ、と考えた時、ふたりの頭に福岡での暮らしが浮かんだ。以前から仲良しだった、オルガン（福岡市南区大楠）の大本さんもいるし、センスは関西よりも東京に近い。福岡ならすっとなじめるはず、と移住を決めた。それまでも引っ越しが多かったふたり。「ちょっと福岡に住んでくる」の感覚だった。

「福岡の人は、知らない人とでも仲良くなれる。私たちもすぐに受け入れてもらえたかな」と愛子さん。行きつけバーができた頃には「なんでそんなに福岡に知り合いがいると？」と地元っ子が驚くほど友達を増やしていた。

福岡での暮らしは「フラクタス」のグラノーラ作りにも影響していく。柑橘類は自然農法の高貴ファーム（福岡市西区）から、山下農園（久留米市）の無農薬いちごも素材のひとつに。地のものとコラボしたフルーツバーも誕生する。

愛子さんは、福岡に住みはじめて、時間にも気持ちにも余裕が出たと感じている。金銭面もシビアで、すべてに対して頑張って結果を出す東京も楽しいけれど、人として生きやすいのは福岡。今のところ引っ越す予定はなし。数年後の才毅君はバリバリ博多弁の少年になる予感。

愛子さんのFUKUOKA MEMO